

## 初代キリスト教美術の解釈学的諸問題

アルフォンゾ・ファウゾーネ

種々の初代キリスト教画像をいかに理解し、かついかに解釈すべきかという問題は、解釈学的問いの中できわめて複雑な錯綜ぶりを顕わしている。たとえば、一世紀に作製された初代キリスト教の記念碑類美術作品について評価を下す場合、教父文献が典拠として必ず引き合いに出されねばならないのか、もしそうだとすればどの程度まで必要とされるのか、という問いは、証拠文献と絵画美術との関係における基本的問題に触れて来ることになる。

E・ダッサマンは、画像を解釈する際、かかる文献的類似性の適用が方法的に妥当かどうかをめぐる学術論争に関し、詳細な検討を加えている。<sup>1)</sup> その際、彼は教父文献以外の膨大な資料にも目を転じ、そこから、初代キリスト教の記念碑美術作品類と文献資料との相互的意味が明らかにされて来る可能性について明らかにしている。

初代キリスト教美術のほとんどのモチーフについては、これまで伝承されている多くの教父文献によって、それとの並行性、意味、類似性等が明確にされている。そこからして、初代キリスト教画像は、単に教父文献のような特定の資料のみをもって充分な解釈がほどこされ得るのか、すなわち、それらの文献は画像を解釈する際の唯一の手がかりとして受けとめられるべきものであるのかという問題が生じてくる。しかし、これについては「歴史批判的考古学の成立当初よりごく最近の研究に至る全期間を通じて多大の疑問」が投げかけられている。<sup>2)</sup>

たとえばシュトゥイベルは、当の文献資料がそれ自体として非科学的か

つ多義的に解釈され得る可能性を有している場合には、かかる文献は画像解釈のために適用さるべきではないとする。<sup>3)</sup>

シュティゲルも、Le Blants 研究を引き合いに出して、教父文献が多義的な意味を有している場合、それを基にして解釈をほどこすとなると、結果的にはあまりにも多様な解釈を許してしまうことになるから、個々の例に適用するとなればそれだけ意味も薄れてくると反対する。<sup>4)</sup>

また、教父文献がそのように多義的な解釈を包含している問題と並行して、かかる画像を創作し、かつ可能にせしめたその民族の信仰と教会神学との間にはかなりの食い違いのあった事実も明らかにされてくる。そして、初代教会に存在した聖像論争を念頭におけばおく程、両者間の対立問題の意味は重要になってくる。<sup>5)</sup>

文献と画像との解釈上の関係問題の中では、更に、この両者の独自の創作活動が解釈の際に混同されてはならないとするより根本的な主張も存在する。つまり、文献も画像もその成立からして相異なる固有のものとして尊重されねばならないもので、前者は「神学的思弁の結果」であり得るし、後者は「その民族の宗教性に基づく独創」として理解されねばならないものであるとされる。<sup>6)</sup> これはとりわけ、コンスタンティン帝によるキリスト教公認以前のキリスト教徒たちによる創作活動について言えることである。同じ関連の中で、クラウゼルも「J・ヴィルペルトも認めているように、初代キリスト教徒の手になる民族的美術作品が、単に教会の公式の教義を図解したものでは決してないということに関しては、今日確信がある」と断言する。<sup>7)</sup>

しかし、ザウゼルはこれと全く逆の立場をとる。彼によると、キリスト教美術に及ぼした教父文献の影響は測り知れないものがあるが、それについては今日もなお十分な評価が下されているとは言えないとされる。彼はそこで、カタコンベ壁画と教父文献との並行的類似性を指摘し、画像解釈のための豊富な例を提示する。<sup>8)</sup> シュトムメルも同様に、当時、教父文献の内容は説教を通じて広く知られていたのであるとして、<sup>9)</sup> かかる画像を

ものにした民族の信仰心と神学とを必要以上に峻別することに対して警告を発している。

かかる多様な論争の中で、教父文献を完全に排除することなく、かつまた、それを直接に適用することをも避けつつ、画像解釈に伴う両者の相互関係の問題を解決することも可能にみえる。ここで、この論争を検討する場合、画像解釈のためにその方法論上、教父文献が正当に適用されるとすれば、ダッサマンの立場を出発点とすることが出来る。<sup>10)</sup>

教父文献は画像解釈のための手がかりとはなり得るが、画像そのものの解釈とはなり得ない。これは逆に、画像が文献の図解そのものとして受けとめられるべきではないのと同様である。古代キリスト教徒の手になるいわゆるイコンの場合には、研究対象となる画像や文献の成立当時の精神的状況を充分に把握する時にのみ、創作活動期の歴史的錯誤や後世における任意の解釈から免れることが出来る。<sup>11)</sup>

ある時代の宗教表象は、文献や画像などによって表現されることでもわかるとおり、表現形式としては多様な可能性を有している。それは、多種多様な表現手段をものにし、同様に種々異なる影響を受けたりまたは独自に生み出したりというようなきわめて人間的、宗教的状况であると言える。<sup>12)</sup>

解釈者によって画像が理解されて行くという解釈的過程においては、その対象の担っている歴史的背景や差し出された疑点が明確に把握されねばならないことは言うまでもない。<sup>13)</sup> その際、画像そのものよりも、典拠となる文献を綿密に調査する方がより明晰な案内を与えることは当然のことである。しかし、その場合どの文献が作者、もしくは、製作依頼者の表象に最も近いかということに注目する必要がある。<sup>14)</sup>

神学的諸文献と初代キリスト教造形作品とを結びつける重要なものは、まがうことなくその民間の信仰である。<sup>15)</sup> その際、民間の信仰は広義に解釈されねばならない。クラウセルは、初代教会における聖像論争に関する論文の中で、三世紀前半に製作されたある装飾石棺の例を引いて説明して

いる。<sup>16)</sup> その中で、彼は他の幾つかの疑問に加えて、果して、当時の司教たちは、教会が公認した以外の別の場所に、かくも具象的な造形作品を設置することを容認したであろうかという疑問を投げかけている。

ここで、明らかに宗教的省察に基づいて製作されたとみなされる聖職者たちの石棺の問題に触れる必要がある。

ところで、民間の信仰については、どのように把握されるべきであろうか。

それは、ある何か「稚拙」な宗教的表象と同列におかれ得るものとは全く違うものである。たとえば、コンスタンティン皇帝の妹コンスタンティアは、キリストの肖像を欲しい旨その製作を依頼したことがあるが、その要望はエウゼビウスによって厳しく拒否されたとされている。<sup>17)</sup> しかし、彼女は当時の教養人であるし、その信仰も広義の民間の信仰の範疇に入れられてしかるべきものである。

しかし、証拠とされる記念碑類を観察する際には、経済的に豊かな地位にあったキリスト教徒のみが、埋葬室に壁画を施し得た事実も考慮されねばならない。実際、埋葬棺をとってみても、大理石のものは非常に高価なものであった。それゆえ、装飾画像類の製作者は、ほとんど有産階級に属する人々であったものと考えられねばならない。しかし、実際に経済的には資産家であったとしても、それがそのまま高度な神学的水準にあったことを意味するわけでは決してない。しかし、そうだからと言って彼らの教養の程度までも過少評価すべきではない。加えて、彼らの深い信仰心が、全く無学さによって裏打ちされたものであったとか、神学的にもほとんど造詣がなかったというふうに考えられるべきでもない。しかしながら、彼らの神学的内容は、当時の司教たち、ないしは神学者たちのそれと必ずしも同じものであったのではなく、むしろ好対照をなす内容のもので、当時のキリスト教徒の置かれた状況の中で培われた信仰心に基づくものであった。それと教会における指導者たちとの神学的内容の相違は、とりわけ、教会内でも少数派に属した人々、または、教会外で形成されてい

た諸団体の中にぎわだつて見出される。この関連の中で、二世紀後半に描かれ、リュコモドスという名のある青年によって彼の寝室に掛けられ、礼拝用として崇敬されていた使徒を題材としたその画像は、かかる相違を如実に示す例として挙げることが出来る。<sup>18)</sup> これは、教会の公式の教えとは必ずしも合致するわけではないものの、キリスト教に関心を抱いていた人たちが、及びキリスト教に何らかの関わりをもっていた人たちでさえも、時にはかような画像の製作を依頼していたことの証左となるものである。

かくして、民間信仰は、当時の聖職者たちをはじめ、社会的ならびに経済的有力者及び宗教的に独自の道を歩んでいた識者たちから影響を受け、形成されたものと言える。また、美術作品も、聖書に通暁していた者だけが、聖書のテーマと描かれた画題とを同定できた事実からして、単に稚拙なキリスト教理解に基づいて製作されたものではないといえる。したがって、当時作品を製作した芸術家たちならびに製作依頼者たちのキリスト教理解の水準は、低級に過ぎなかったとか、または、無教養な人間であったとするような皮相的な評価は、明らかに却けられねばならない。

F・ゲルケは更にかかる考えを発展させ、一世紀の美術作品の解釈に際しては、古代世界の崩壊して行く末期的状況にその視点を据え、そこから、作品の持つ神学的意味表現を吸収すべきであると強調する。<sup>19)</sup>

実際、初代キリスト教美術は、教会の公式の指導の下に成立したわけでもなければ、その公式の教義をそのまま直接描写したわけでもない。これについては、既に以前からH・コッホやH・アヘリスの研究によっても知られていることである。<sup>20)</sup>

さて、ここで問題となってくるのは、民間信仰に、神学上の影響はいかなる形で及ぼされたのか、また、当時のキリスト教徒集団はいかなる状況のもとに置かれていたのかということである。これに対しては、説教とカテキズムが最も大きな役割を果たしたことが指摘され得る。<sup>21)</sup> そして、かかる教化的手段が直接に民間信仰に影響を与えたところから、独特の具象的表現方法となって引き継がれることになった。それゆえ、作品としての

画像類も、その当時のキリスト者たちの信仰のあり方の反映、ないしは、その時点における信仰表明としての記録文書的性格を擁しているものとして受けとめられる。また、ケッティングは、製作の経緯や可能性からすれば、祭式用画像や新・旧約両聖書の中のある情景に題材を求めた画像と、修徳ないしは教化を目的とした信仰表明に関する画像との間には、やはり区別が設けられるべきだとする。<sup>22)</sup>

しかし、この点においても、コンスタンティン皇帝時代以前と以後とでは、宗教史的にみても、それぞれ異なる条件が伴っていることから、作品の成立状況もおのずから違っているとと言える。

改宗によって新しくキリスト者になった人々は、その洗礼準備の期間、修徳や教化に関する事柄について熱意を込めて学んだわけであるが、その内容はまた彼らの心にそのまま深く刻み込まれ、全生涯を通じて消えることなく宿り続けたものであると共に、死後は、それまで抱き続けたその表象を自発的に自分の墓所に刻み込ませたのである。彼らはそれまで、教父たちならびに聖職にあった者と関わりを持っているが、それは説教やカテキズム及び典礼などを通じて獲得されたものである。

そこからして、かかる画像を成立せしめた宗教的関係の背景としての、およそその文化的、精神的状況が理解され得る。当時のキリスト教徒集団のキリスト教に関する理解と知識は、大神学者たちの教授によってかなり深いものがあつた。多くの画像は、それらの教えによつてのみ開花し得たものである。他方また、ある特定の神学思想の構造は、かかる画像として表現されたものの中においてのみ検証され得るものであり、かつまた、若干の画像においてはそのようにのみ理解されるべきものもある。

画像の類型論 (Typologie) 的理解の方法に関しては、既に、アレキサンドロリのクレメンスにおいて見出すことが出来る。他方、彼以前にも、殉教者ユスティヌス (紀元 165 年没) が木彫のノアの方舟と木製の十字架とを類型論的に結合させている。<sup>23)</sup> F・オーリーによれば、「類型論的思考法は、オリゲネス以降の神学及び教父たちにより信頼をかちえている」

とされている。<sup>24)</sup> ところで、オリゲネスその人は聖像反対の立場をとるが、聖書釈義においては豊富な類型論的解釈法をとっている。それが後には、具象的描写法を推し進める大きな契機となると共に、多様な表現法をもたらし、伝承する結果になったことは実に興味深いことである。<sup>25)</sup>

三世紀及び四世紀に入ると、聖書解釈における類型論的方法是、ほとんど確固なものとなっている。<sup>26)</sup> しかし他方、初代キリスト教美術の中には、字義、寓意、象徴などによる聖書の解釈法と共に、古代異教徒の風習の残滓が交互に入り混っているのも見逃せない事実である。

E・ダッサマンは、画像が主題別になっている現象を取り上げ、それによって、たとえばキリストの病者の治癒、奇蹟、キリストの権能と神性の由来などがより明確にされてくるはずであると強調する。

美術作品における「神学的水準」がいかなるものであったかについては、各画像及び装飾石棺を他の種々の画題と共に、その構成、関連などの側面から観察することにより、より明確に把握されてくるし、またそうすることによって、神学上の命題や画像と教義内容の緊密性の度合も認識されてくる。また、画像の製作場所ならびにそれを完成に至らせるまでの技術的方法の観察は、画像を時代別に配列することと並んで、画像の意味をより深く探る意味で重要なファクターとなるものである。

ある種の画像の系譜をたどってみると、その源は異教徒の描写内容ときわめて近いところに見出し得るものもある。多くの異教徒の製作所においては、祈る人、羊を担ぐ青年、オルフェウスやオデュッセイアの中のある場面などが題材として良く選ばれ描かれていたが、これらはいとも容易にキリスト教的意味に転換され得たし、かつ、他の主題と共に、違う関連の中に随意に押し込むことも出来た。

画像の主題別配列を見ると、その内容は教化的ないしは証言的性格を帯びていたものであり、かつ、かかる性格を必要としていたものであるだけに、それらの主題は任意的でも偶然でもあり得ないものである。類型論的概念は、種々枚挙される主題の描写を支えている背景であり得るがゆえ

に、それは神学的、哲学的ひいては宗教政治的にもしっかりとした基礎を有するものであったと言える。<sup>28)</sup>

1975年、ローマで開催された第9回国際初代キリスト教美術会議においては「初代キリスト教絵画芸術の起源について」を主題に広範囲な議論が交わされた。その際、H・フォン・ブランデンブルグによって提起された問いは、解釈学と方法論とに基本的に関ってくる論争であったが、彼は、同問題についての統一見解は存在しないということを明示することに大きく寄与した。他方、教父文献の適用に関する問題、典礼、司牧的観点からのアプローチ、及び一世紀における文化的宗教的に規定された形態等に関する作業仮説については、若干、実りある解答が引き出された。<sup>29)</sup>

異教及びユダヤ教からキリスト教に回宗した人々の手になる画像及び彫刻に関するさまざまな研究テーマは、一世紀においてはキリスト教独自の芸術が未だ存在していなかったところから、特に興味深いものがある。ここで、彼らにとって新しい「喜びのおとずれ」の信仰内容が、新しく独自の表現形式をもって注意深く開始されたからである。<sup>30)</sup>

そこで、異教徒が元来保持していたレパートリーのうち、どの形式がキリスト教受容後も維持され、または、新たに形成される必要があったのか。これについての即答は既に触れたとおり避けられねばならないと共に、未だキリスト教化されていなかった世界にもたらされたこの「新しい」芸術を明瞭にするには特殊な方法論が必要とされる。これについてブランデンブルグは次のように言う。「そこでわれわれは、装飾石棺用の題材として刻み込まれたものやその適用の背後に、あるまとまった体系や一貫した概念を探し出そうとしているのではなく、参照、シンボル、聖書の中に明記されている救いの真理の想起として描かれた画像を見出そうとしているのである。<sup>31)</sup>」

しかし、それらは当時の文化及び歴史の下に被い隠されているわけであるが、その衣を取り払うことによって、果たして本質的にキリスト教的なものを浮き彫りにすることが出来るであろうか、また、それをもって時空



的に隔たりのある当時の文化を今日再び対話の場に連れもどすことが出来るのであろうか。これらの問いはひとえに厳正な解釈学の適用にかかっている。<sup>32)</sup> これは常に、喜びのおとずれである「新しいワイン」は「新しい皮袋」に移し入れ得るということに係って行く問題であり、それなしには、イエズス・キリストへの信仰である宗教と、それに伴っている文化とが混合されてしまうことになる。

初代キリスト教美術の理解の地平に関して言えば、カタコンベにおけるその壁画を例にとると、——装飾石棺や碑銘の場合も共に類似していることではあるが——カタコンベはキリスト者が最後の安息場所として設けたその目的性をもっておのずから説明されうる。これは、現実としての物理的な死が、新たにキリスト教的に意味転換され、救い、救い主の再臨、復活と永遠の生命が記念される、その埋葬場所に係って来る問題である。

画像が、その当時、読み書きの出来なかった者たちの表式としての「生きた言葉」であるならば、それは今日「新しい言葉」に移し換えられることによって、はじめて正当な解釈を得ることになるであろう。<sup>33)</sup> それら画像はコミュニケーションの手段であり、かつ、コイメテリオンの場合と同様に、当時の言葉は今や黙したままであるとしても、ある場所における個々人の信仰表明の証文である。<sup>34)</sup>

翻訳・生田秋

#### 注

1. E. DASSMANN, *Sündenvergebung durch Taufe, Buße und Märtyrerfürbitten in den Zeugnissen frühchristlicher Frömmigkeit und Kunst*, in *Münsterische Beiträge zur Theologie* Nr. 36, Münster 1973.
2. E. DASSMANN, op. cit., 54, E. KIRSCHBAUM, *Monumenti e letteratura nell'iconografia paleocristiana*, in: *Atti del VI Congresso Internazionale di Archeologia Cristiana*, in: *Studi di Antichità Cristiana* Nr. 26, Città del Vaticano 1965, 741-749.
3. A. STUIBER, *Refrigerium Interim, Die Vorstellung vom Zwischenzustand und die frühchristliche Grabeskunst*, in: *Theophaneia* 11, Bonn 1927.

4. P. STYGER, *Die altchristliche Grabeskunst, Ein Versuch der einheitlichen Auslegung*, München 1927, 71-72.
5. V. FAZZO, *La giustificazione delle immagini religiose dalla tarda antichità al cristianesimo*, in: Edizioni Scientifiche Italiane, Napoli 1977, 7-20; 313-364.
6. E. DASSMANN, op. cit., 56.
7. TH. KLAUSER, *Erwägungen zur Entstehung der altchristlichen Kunst*, in: TH. KLAUSER, *Gesammelte Arbeiten*, in: JbAntChr E. Bd. 3, Münster 1974, 334. 及び註 33, 同以下参照。
8. E. SAUSER, *Frühmittelalterliche Kunst-Sinnbild und Glaubensaussage*, Innsbruck-Wien-Wünchen 1966, 104.
9. E. STOMMEL, *Beiträge zur Ikonographie der Konstantinischen Sarkophagplastik*, in: Theophaneia 10, Bonn 1954: これについては以下を参照のこと。H. KOCH, *Die al.christliche Bilderfrage nach den literarischen Quellen*, in: Forschungen zur Literatur und Religion des Alten und Neuen Testamentes, NF, Heft 10, (Göttingen 1917), 87頁以下。
10. E. DASSMANN, op. cit., 60.
11. R. BIANCHI BANDINELLI, *Storicità dell'Arte Classica*, Bari 1973, 41頁以下。及び R. BIANCHI BANDINELLI, *Introduzione all'Archeologia*, in: Universale Laterza Nr. 334, Roma-Bari 1976<sup>2</sup>, 125-150.
12. E. STOMMEL, *Beiträge zur Ikonographie*, ibid., 68.
13. P. BROWN, *Religion and Society in the Age of Saint Augustine*, New York 1972; M.A. HANFMANN, *Arte Romana—Sintesi Moderna dell'Arte di Roma Imperiale*, Milano 1965, 15-44.
14. G. MATTHIAE, *Pittori, committenti, fruitori nella Italia altomedioevale*, Roma 1977, 5-89.
15. TH. KLAUSER, *Erwägungen*, op. cit., 343頁以下。
16. TH. KLAUSER, *Die Äußerungen der alten Kirche zur Kunst*, in: JbAntChr E. Bd. 3, 336.
17. J.D. BRECKENBRIDGE, *The reception of art into the early church*, in: Atti del IX Congresso Internazionale di Archeologia Cristiana, in: Studi di Antichità Cristiana Nr. 32, Bd. 1, Città del Vaticano 1978, 361-369.
18. B. KÖTTING, *Von der Bildlosigkeit zum Kultbild*, in: Bild-Wort-Symbol in der Theologie, Hrsg. W. HEINEN, Würzburg 1969, 114.
19. FR. GERKE, *Christus in der spätantiken Plastik*, Leipzig 1941<sup>3</sup>, 9; FR. GERKE,

- Ideengeschichte der ältesten christlichen Kunst*, in: *Zeitschrift für Kirchengeschichte* 59 (1940), 1-102.
20. H. KOCH, *Die altchristliche Bildfrage*, *ibid.*, 90; H. ACHELIS, *Das Christentum in den ersten drei Jahrhunderten*, Leipzig 1925<sup>2</sup>, 222; J. WILPERT, *Prinzipienfragen der christlichen Archäologie-mit besonderer Berücksichtigung der "Forschung" von Schultze, Hasenclever und Achelis*, Freiburg 1889; 同書 100頁においてはヴィルペルトの強い対アヘレス批判が見られる。
  21. E. DASSMANN, *op. cit.*, 58. 「(当時の) キリスト者の意識は、教会の説教を通じて形成されたものであるが、それを念頭に置かない限り、初代キリスト教美術の内容的特徴を理解することは出来ない。」
  22. B. KÖTTING, *Von der Bildlosigkeit*, *op. cit.*, 112.
  23. E. SAUSER, *Frühmittelalterliche Kunst-Sinnbild und Glaubensaussage*, Innsbruck-Wien-München 1966, 105.
  24. F. OHLY, *Schriften zur mittelalterlichen Bedeutungsforschung*, Darmstadt 1977, 335.
  25. H. KOCH, *Die altchristliche Bilderfrage*, *op. cit.*, 80.
  26. E. STOMMEL, *Beiträge zur Ikonographie der Konstantinischen Sarkophagplastik*, 61; 64. 「類型論は、それについて多くを説明するものではあるが、決して全てについて説明するわけではない。それゆえ、類型論をもって一切の説明がつくと考えられるべきではない。」
  27. E. DASSMANN, *Sündenvergebung*, *op. cit.*, 73.
  28. F. OHLY, *Schriften*, *op. cit.*, 320. 註24参照。
  29. *Atti del IX Congresso Internazionale di Archeologia Cristiana*, in: *Studi di Antichità Cristiana* Nr. 32, Roma-Città del Vaticano 1978, Bd. 1, 331-490.
  30. H. BRANDENBURG, *Überlegungen zum Ursprung der frühchristlichen Bildkunst*, in: *Atti del IX Congresso*, Bd. 1, 331-360. 特に 347. 357 及び同以下。
  31. H. BRANDENBURG, *Überlegungen*, *od. cit.*, 347. このテーマに関しては以下をも参照。A. QUACQUARELLI, *Per una revisione critica degli studi attuali sulla simbolica dei primi secoli cristiani*, in: *Atti del IX Congresso*, Bd. 2, 401-416. 及び B. BRENK, *Spätantike und Frühes Christentum*, in: *Propyläen Kunstgeschichte Suppl.* Bd. 1, Frankfurt a.M.-Berlin-Wien 1977, 16-102. H. BRANDENBURG, *Frühchristliche Kunst in Italien und Rom.* *op. cit.*, 107-108.
  32. P. BROWN, *Religion and Society*, *op. cit.*, 19-21.
  33. J. FINK, *Mythologische und biblische Themen in der Sarkophagplastik des 3. Jahrhunderts*, in: *RivAC* 27 (1951) 167-190.

34. この「言葉」に関するテーマについては、“*segni iconici*”を一般言語以外のひとつの言語表式として扱っている Eco Umberto の言語分析研究がひとつの指針となろう。

U. Eco, *La struttura assente-Introduzione alla ricerca semiologica*, in: *Nuovi Saggi Italiani*, Milano 1977<sup>9</sup>, 107-230.

## Aspekte zur Hermeneutik frühchristlicher Monumente

Alfonso FAUSONE

Der Autor des Artikels beleuchtet kurz eine grundsätzliche Problematik für das Verständnis frühchristlicher Kunstwerke. Eine bis heute nicht zur Ruhe kommende Diskussion zur Hermeneutik frühchristlicher Kunstwerke war 1975 Anlass des IX. Internationalen Archäologenkongresses für Frühchristliche Kunst in Rom. Dort wurden einige Arbeitshypothesen zu den Ursprüngen der Frühchristlichen Kunst erarbeitet.

Weit davon entfernt die Frühchristliche Kunst auf rein jüdische oder römisch-hellenistische Ursprünge zurückführen zu wollen, stellt der Autor das komplexe Zusammenwirken von Kirchenväterlehre, Katechese und Bibelunterweisung auf der einen Seite und das unterschiedliche lokale, soziale und kulturelle Niveau der einzelnen Christen oder bestimmter christlicher Schichten auf der anderen Seite, die ihren spezifischen Beitrag zur Schaffung einer sogenannten 'christlichen Volkskunst' leisteten, in den Vordergrund.

Den eigentlichen Ausschlag zur rechten Bildinterpretation gibt dabei der konkrete 'Bildkontext' und sein Bezug auf den damaligen 'Sitz im Leben' ab. Für den Fall der Katakombenkunst hieße das: sepulkraler Kontext, in dem das Bild tastender Ausdruck einer 'neuen Sprache' wird, die vom Glauben an das Jenseits und an die Auferstehung des Fleisches kündet.